箱根大文字焼き

箱根大文字焼きは夏に箱根で行われる最後の主要祭りで、山腹に線状に松明を灯し、大の字（great, large の意）を形成します。これは仏教において、ご先祖様の霊のこの世への一時的な帰還をお迎えしてまつるお盆の時期の最終日となる、8月16日に開催されます。実際には、お盆はお墓を訪れて掃除し、亡くなった方を偲び、ただ家族と時間を過ごすことを意味します。大文字焼きは、箱根がレジャースポットとして浮上しはじめた1921年に観光推進のために始められたものですが、この祭りとその知名度を上回りモデルともなった京都の五山送り火が慣習的信仰において果たす役割とは、あの世にご先祖様の精霊を送り出すことです。強羅にある明神岳の頂上付近に据えられた火は、200～300本の松明によって灯されます。松明はそれぞれ約100本の篠竹を束にして括ったもので、山腹に仕組まれます。6月から祭り開催日までの間は、地元のボランティアが毎週日曜日に集まってイベントの準備を行います。完成した文字は上から下まで100メートル以上になり、幅もそれに近いです。火が灯されると松明はひっくり返され、しっかり素早く均等に燃えるように、反対側にも火が

つけられます。火が燃える中、花火も打ち上げられ、死者の精霊を盛大に見送ります。